

連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

版 B6判
三五二頁
再 三五〇〇円
連句の実作・鑑賞・研究に
必須の知識をすべて網羅！
初心者から研究者まで使え
る本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木
〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

季刊 連句 第17号



水原秋桜子編 二二〇〇円
俳句鑑賞辞典
貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円
現代俳句鑑賞辞典
結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編 二八〇〇円
季語辞典
日本の季節にまつわる言葉やスモッグ・不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円
難解季語辞典
古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

- 国語学大辞典 国語学全編 B 一〇〇〇〇円
- 国語慣用句大辞典 白石大二編 B 一〇〇〇〇円
- 国語慣用句辞典 白石大二編 B 一〇〇〇〇円
- 国語史辞典 林巨樹他編 B 一〇〇〇〇円
- 日本語 語源辞典 堀井幸以他編 B 一〇〇〇〇円
- 京都語辞典 井之口・堀井編 B 一〇〇〇〇円
- 擬音語擬態語辞典 天沼 編 B 一〇〇〇〇円
- 隠語辞典 堀井 実美編 B 一〇〇〇〇円
- 近世上方語辞典 前田 勇編 B 一〇〇〇〇円
- 花柳風俗語辞典 堀井 実美編 B 一〇〇〇〇円
- 明治新語俗語辞典 堀井 実美編 B 一〇〇〇〇円
- 難訓辞典 中山 泰昌編 B 一〇〇〇〇円
- 名乗辞典 堀井 実美編 B 一〇〇〇〇円
- 名数数詞辞典 森 隆彦編 B 一〇〇〇〇円
- あいさつ語辞典 奥山 恭彦編 B 一〇〇〇〇円
- 新版 ことは遊び辞典 鈴木 兼三編 B 一〇〇〇〇円
- 類語辞典 鈴木 兼三編 B 一〇〇〇〇円
- 類義語辞典 徳川 寛島編 B 一〇〇〇〇円
- 表現類語辞典 藤原 玄一他編 B 一〇〇〇〇円
- 新版 文章表現辞典 神尾 村松編 B 一〇〇〇〇円

東京堂出版

亀戸神社と連歌所 (南柏雑記 15)	1
知らざるをたのみて.....	わだ としお..... 2
—美術館めぐりの旅から—	
しおりの場.....	東 明 雅..... 7
「市中は」の巻 鑑賞(Ⅲ)	東 明 雅..... 8
脇起り追悼歌仙 春の人.....	佐藤 和夫 捌..... 14
香歩先生を悼む.....佐藤和夫・香歩さんのこと.....草間時彦	
亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行 第二十一回 猫蓑会.....	16
第一部 正式俳諧興行 (一)役割 (二)次第	
二十韻「遷東や」 亀戸天神社 木村恒雄氏書簡.....	17
第二部 二十韻 七巻.....	
捌 東 明雅 内田 麻子 中田あかり 馬場 彬風	
雑賀 遊 吉沢てるよ 上月 淳子	
文台「左澤」(あてらざわ) 製作雑感.....	五十嵐讓介..... 20
亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行.....	式田 和子..... 21
絶頂の城.....	22
連句教室 百韻 待春	杉内 徒司 捌..... 24
花野連句会 二十韻 下萌.....	小出きよみ 捌..... 26
柏連句会 二十韻 藤の房.....	井手 樽晴 捌..... 28
木の芽風.....	東 郁子 捌..... 28
岡本春人著「ばれんたいん」 平井照敏著「かな書きの詩」 吉岡梅游著「連句・俳句自選集」 東京義仲寺連句会芭蕉庵の会著「花あんず」 佐藤和夫著「俳句から HAIKU へ」..... 6 廣田二郎著「芭蕉と古典」	
雁帛往来・連句会案内.....	29

亀戸神社と連歌所

南柏雑記 15

雅

亀戸天神は、寛文初年(一六六一)に太宰府天神から奉遷されたものであり、そのころは東連歌所・西連歌所の二つの建物があった、將軍(家綱)も立よったという。その後、享保(一七一六―一七三五)のころまでは、存在したが、火事で消失したらしく、西連歌所のみが明和元年(一七六四)再建され、これも大破して、寛政十二年(一八〇〇)再び建てられた。この間、菅公の八百年忌・九百年忌には、特別に千句連歌が興行された外、年中行事としては、正月二日に裏白連歌神事(懐紙の表ばかり八句の連歌)、七月七日には和歌・連歌の神事、九月十三日には連歌の神事が行なわれ、また、毎月二十五日には月次の連歌会が催されたのである。

その作品も残って、懐紙の一部は整理され、「亀戸天満宮史料集」(昭和五十二年刊)に掲載されている。

さて、その西連歌所は寛政十二年の地図によれば、瓊門(中門)の前の池に架った三の橋の西側にちゃんと記されているが、寛政十三年の朱印絵図面には記載されていない

い。これはこの年御開帳があった為、その場所が葎簀張の水茶屋になっていようである。水茶屋とは路傍や境内でお茶を飲ませる茶屋のことだが、せっかくの連歌所は毀されたのか。勿体ない話だが、これは、一つには当時の連歌の衰微ぶりを物語るものであろう。幕府では流石に、正月の吉例として、いわゆる柳營連歌を幕末まで残存していたけれども、それは一般の庶民とは何の関係もないものとなっていた。俳諧・雑俳が庶民の人気をよんでいた時代に、いくらその俳諧や雑俳の祖ともいえるべき連歌の神様が天神様であると言っても、庶民を説得できなくなったのである。そう言えば、全国の天神様のうち、連歌道で最も權威のあったのは、京都の北野天神で、すでに十四世紀末ごろから、千句・万句の興行がなされ、はじめは社坊公文所、続いて松梅院で興行され、その長を北野連歌会所奉行、あるいは宗匠と呼び、連歌界のオーソリティとなったのである。この北野の連歌会所がどうなっているか、確かめてはいないけれども、すくなくとも、正式の連歌のできる方が殆んどない今日では、たとえ建物は残っていると、有名無実のものであり、おそらくは、北野神社も、昨今の受験ブームのあおりをうけて、合格祈願の絵馬で埋まってしまうことだろう。神様であっても浮世の転変は避けられないとすれば、まして凡人は、亀戸天神の池畔に咲きほこる藤波の美しさに、一時の鬱を散すのも神の功德であらう。

知らざるをたのみて……

——美術館めぐりの旅から——

わだとしお

1

縁あって地方の美術館めぐりをしています。いわゆるドサ回りというのでしょうか。楽しいのですけれどもしかし忙しい。きのう網走にいたかと思うと今日は今治。墨突くるまの生活を続けています。そのあまりに閑暇のなさを憐まれてか、本誌に一文を草せよとのお誘いをいただいた。風流韻事に思いをめぐらす時間を与えようとの温情有難くお受けしたもののさて、「連句に関する事なら何でも」にはまいりました。書こうにも何にも手持ちがない。村塾閉関以来の不勉強がたたりました。

ええい、十界互具の俳諧です。美術館めぐりの間に会った「画家の言葉」に、頭のすみに生き残った俳諧師が感応することしばしばありました。これにしよう。俳諧練達の読者諸兄姉に失笑して頂くことの一片くらいは記せるかも知れない。観念の臍を噛んで以下我田引水の強弁。ま、画家と俳諧師、井戸は違っても芸術の水脈は通底している

いることでしょう。緑の芝生に寝そべる真赤な腰巻の裸婦は、当時美校校長だった藤島武二をして絶対卒業させんとまで激怒させたが、彼を卒業させないと何年でもこういう作品が卒展に並ぶことになり困りますと誰かがとりなしたお蔭でようやく通ったというイワクツきの作品でした。この日本のフォーブの記念碑的作品は、今は東京国立近代美術館に收藏されています。

そんな前衛中の前衛にしてアカデミックを説いているのです。アカデミックとは、俳諧でいえば古法であり、式目であり、芭蕉のことと読み変えてもいいでしょう。式目を敬遠し、芭蕉も読まず、カラッポの壺を抱いてフラフラと新しがりやの連句人たちに、この一文を読ませたいとききりに思ったことでした。

もっとも、万の一番言いたかったことは、その後半にあるのだと思います。アカデミックを詰め尽した壺の底からはね返す個性の誕生——現代連句だって、どれほどその出現を待っていることか。返す刃で斬られているのは、式日サロンで昼寝をしているぼくたちではないでしょうか。

東北新幹線を新花巻で降りて、東京方面からいって左へ行けば宮沢賢治の記念館（中央の丘の頂上を踏めば頭上に地球図の広がる仕掛けの、あの一瞬の美しさ）。右へ道をとれば万の生まれた東和町があります。丘の裾に小さくまつまつた赤・青のトタン屋根。平凡な町です。そんな日本近代美術史上の巨人がわが町から生まれたとは、町の人も永く知らず、二、三年前ようやく小さな町立美術館が建ちま

ことでしょう。

2

——芸術家は先づ壺の様なものだと思ってみるとよい。その壺にアカデミックを段々詰め込んで口までになったら猶山盛りにして棒でうんと押し付けるのだ。屹度底からはね返して来るだろう。その力を個性と言ってもよいのだ。はね返さないのは無個性の凡くらだ。軟教育ではだめだ。硬教育がよいのだ。

これがあの万（よろず）鉄五郎の言葉であるところが面白かった。あの、といったのはご存じの通り、万は日本のフォビズム、キュビズムの先駆者として、明治から大正を炎のように駆けぬけた前衛中の前衛画家だからです。「僕によって野蛮人が歩行を始めた」という言葉もあまりにも有名です。明治四十五年東京美術学校卒業時の卒業製作「草上裸婦」の強烈なイメージはどなたの脳裏にも残って

した。

生家は回送問屋「八丁」。花巻地方と遠野・釜石地方との間の農・海産物の取次をして、明治初年、一日の儲けが壱千円を超すといわれた豪商。八丁のおばあさんは好きなどころで汽車を呼とびめて乗ったといわれるほどの羽振りだったそうです。時移り、時代の波に立ち並んだ土蔵も次第に滅り、ただひとつ残っていた最後の土蔵が、一昨年二月取り壊されて町の大通りになったと聞きました。

3

ぼくはかねがね、俳諧の座に連なるには、一種の哲学というところとオーバーですが、少なくとも一種の心境を持つことが必要だと思っていました。膝送りのようにして何の制約もない順づけをする、いわば座興のような場合は別ですが、昨今行なわれている競いづけ（とでもいうのでしょうか）の場合には、どうしてもそういう心境にならざるを得ません。それは、自分の生きていく空間を信じてと共に、それとは全く異なった空間があることを感じ、その空間の美に感じ、それら異域ともいえるべきものを含んだ所ではじめて世界が成立することを容認する心境とでもいったらいいでしょうか。要するに、異境、他者、未知と共存することによって世界はでき上がっているのだ——という信仰のようなものです。

そんなこと、あたり前じゃないかと一蹴されてしまえば

それまでですが、それをハッキリと認識することがなかなか難かしいと思います。ある時その心境に一脈かようとこのある詩に出会ったことがあります。たまたま今年生誕百年を迎える、彫刻家・画家の石井鶴三の詩です。

——兄のふむ土はせまけど／ふまざるをたのみてひろし／人の知やすくなしされど／知らざるをたのみてひろしと／いにしへのひじりはいはいはしき／世のつねは知れるをたのみ／生きの世をおのれせまくす／知らざるをたのみてひろし／知らざるをたのめとらす／たふとしやひじりがをしへ／かしこみてをしへにはそひ／ふまざるをわれはたのみて／知らざるをわれはたのみて／世をひろく生きむ

反歌

よのつねは知れるをたのみ知らざるをたのめとらすことのためとき

石井は『莊子』を読み、その中の「足の地におけるやふむ。ふむといえどもそのふまざるをたのみて、よくひろきなり。人の知におけるやふなし。ふなしといえども、その知らざるをたのみて、のち天のいうところを知るなり」という一節に感動して、この詩を作ったといえます。

これは美しいひとつの人生観ではないでしょうか。昨今いじめブームとやらで死にいたる子供供たちに、この境地の片鱗でも語ってやれたらと思ったりもします。自分は自分

はと鼻にかけるも、内にもってしまっても、なあに自分の踏んでいるだけの狭い土を頼みにしているようなものだ、というのでしよう。人は、まだ自分の足の踏まない広大な土を頼みにしているから、自由自在に闊歩することができるといいます。

俳諧に水を引けば、踏まざるは他者の生きる地であり、未知であると思われず。連衆としてのぼくは絶対に一句をもって世界を表現し終ろうとは思わないでしよう。踏まざるをたのめといえます。他者の句があり、他界があり、自己の世界とそれを併せ持つことによってはじめて完成する俳諧世界のあり方。他者は更に他者呼び、さまざまに輝く複合空間の無限連鎖の上に喜遊の一大乾坤を建立することこそぼくたちの俳諧ではなかつたでしょうか。己れの句に拘泥することをやめよ。一処にとどまることをやめよ。踏まざるをたのめ、というのはまた更にいえば、新しい天地を求めて次から次へと進め、ということでもありません。

信州の上田市にある石井鶴三美術館で、この詩に出会いました。石井は日本画家を父に東京・下谷の仲御徒町に生まれました。ご存じ相撲ファン、チャキチャキの江戸っ子の筈なのに何故、遠い上田に美術館が建ったのでしょうか。石井は昭和四十八年八十五歳で亡くなっていますが、大正十三年から昭和四十五年まではほぼ半世紀にわたってこの上田で夏の講習会を開き、地元教師たちに彫塑を教えました。その間休んだのは、昭和二十年の夏だけだったと

いますからすこい。教えを受けた教師たち、つまり小泉（ちいさがた）上田教育会の方もまた「石井先生を偲び、報いるために」館を開設した——と、実にいい話を聞かせて頂きました。

信州の山々を石井は愛し、二十代からほとんど毎夏登っていたそうです。その山中で、石井はしばしば幻像を見るようになりす。山の中に老若男女が裸で思いのままに生きている姿を見るのは楽しいと書いています。そして、一団の雲を両手にささげて山を越えるたくましい若い男の像を作ります。森の少女と名づけて溪流に水浴する若い女を作ります……。もっとも、「代表作を」と館長さんに聞いたら、示されたのは、しなびた乳房を垂らした信濃の老婆と皺だらけの老爺の一对でした。（もちろん立派な作品ですが）。

美術館は実は今は仮住い。大正の初め、ご即位を記念して建った建物だそうで今は市の図書館。老朽化とりこわしのきまったのを借りました。昔の女学校を思わせる板羽目、大きな窓、中へ入るときしきしときしむ大きな階段、床が石井鶴三という人を思わせていっそ快いのです。

4

北陸本線で金沢から三つ目、松任という小さな町に行きました。ここに、前出石井鶴三の親友で、今年九十四歳なお現役で仕事をしている中川一政の美術館が建ったからで

す（昨年十月のこと）。この人もまた東京生れの東京育ちなのですが、お母さんの生地この松任を愛して作品を寄贈し、できた美術館とのでした。

真鶴半島にアトリエを移した中川は、福浦というその漁港だけを十三年間描き続けます。赤や青のトタン屋根の今までの家が目ざわりになって、対象を箱根・駒ヶ岳に変えます。今度はここへ十六年通いつめる。基地が出来てヘリコプターの音が邪魔だといってアトリエの日まわりとバラへ帰ってきたのです。自然から受ける感動を描き続ける。ひとつの対象を凝視して倦むことを知らないこの画家の、独学独往の画も書も歌も文も、生き方そのものが人を魅了してやみません。

『庭の眺め』の一節を引かせて頂きます。画家はその中で、自分の家に集まってくる人々を私のコレクションであるといっています。

——私のコレクションは画かき、彫刻家、小説家、舞踊家、俳優といふやうな芸術関係ばかりでなく、医者もあるし、銀行の頭取もあるし、大工も百姓もある（中略、そしてそれらが）畏るべきもの、尊敬すべきもの、豪華なもの、滑稽なもの、幽美なもの、堅実

「季刊連句」のバックナンバーとり揃えてありますので御希望の向きは発行所へ御申込み下さい

なもの、いろいろの感銘を持ってゐる。テンポといったがこれらは生きものであるから、生きてゐるかぎりテンポを持ってゐる。変化を持ってゐる。その人の生活が生き生きして、実際に自然なり人生にぶつかってゐるから話に感じがある。感じのない話くらゐ退屈なものはない。(中略)常識に感銘はない。みなが常識の程度に暮してゐたら、こんな退屈な世界はない。

紙数が尽きかけています。手短かに書けばここにあるコ
レクションの眺めの、何とやらやむべき俳諧世界そのもの
なんだらうということです。変化のこと、感じのある話の
こと。そして焼き直しさせて貰えば、常識的な句に感銘は
ない。みなが常識の程度の句を並べていたら、こんな退屈
な俳諧はない……。

書きたいことはまだまだありますが、これら「画家の言
葉」が現代連句の世界に遠くかすかにでも、蓮の糸のごと
くにもつながっていらしいなと願ひながら筆を擱きま
す。

なお、書き落としました。松任町は、ご存じ加賀ノ千代
女の町であり、あの『地上』の島田清次郎の町です。幼年
時あのベストセラーに魅せられた記憶のある頃は、冬田
の中に孤立する一かたまりの暮群に向つて急いだのでし
た。

☆新刊紹介☆

☆「ばれんたいん」 岡本春人著
岡本春人氏の喜寿の記念、恋句のみの連句集。昭和
六十二年二月刊。

おしげりの灯を細め細めて 春人
松風と召されさむらふ中の舞 星女
お二人の末永い俤を祈るものである。

☆「かな書きの詩」 平井照敏著

——蕪村と現代俳句——

著者は青山学院大学教授で、俳誌「楨」主宰。明治
書院発行。二四〇〇円

☆「連句・俳句自選集」 吉岡梅游著

著書は四国丸亀の人、昭和六十二年一月刊。

☆連句集「花あんず」

東京義仲寺連句会芭蕉庵の会。昭和六十二年二月
刊。発行責任者、調布市上石原二二七―九川野蓼艸
氏。頒価五〇〇円

☆「俳句からHAIKUへ」 佐藤和夫著

——米英における俳句の受容——

著者は早稲田大学教授。俳句文学館国際部長。南雲
堂発行。定価二〇〇〇円

☆「芭蕉と古典―元禄時代―」 廣田二郎著

芭蕉とその詩の伝統を追求した大著。明治書院発
行。定価一八、〇〇〇円

しおりの場

東明雅

「季刊連句」も十七号を迎えた。掲載した作品の数は正
確に数えたことはないが、夥しいものに違いない。その中で
忘れられぬ作品が幾つかある。その一つが創刊号の「風の
二月」である。この作品にはコメントがついているから、
それを読めば尚一層よく理解できるだろう。発句・脇と流
石に当代一流の人のやりとりには目をみはるものがある
が、(季刊連句創刊号一〇頁―一一頁参照)

10 梢かくれに月代の雲

照敏

11 外廁まるめたる背のやや寒く

徒司

12 蕎麦こねてをり姿を死なせて

照敏

1 秋の川橋をくぐりて行くばかり

同

と、このあたりをコメントに『外廁』から「秋の川橋をく
ぐりて行くばかり」の三句をこの一巻の山とみたい。述懐
を思わせるこの句に、ナウ迄、何か胸につかえていたもの
が爽やかに吹きぬける』と言っているのは、この句だけで
なく、大打越・打越・前句と変化しながら、一種のあわ
れ、しおりがあるからだろう。

そういえば、第十五号所載の芭蕉忌二十韻六巻のうち、
米谷貞子さん捌きの一巻も表四句がしっかりして最後まで

付味、転じが利いたすばらしい作品だが、この作品にも、

1 銭亀を捕へし子より買ひ受けて

雅代

2 長江長城中国の旅

明雅

3 厠口あけっぱなしに風が抜け

雅代

4 はや呆けて来し舅姑

みづゑ

の一連がある。御存じの通り、中国風の側は明けっぱなし
で、旅行する日本人は困ることが多いが、それをすぐ舅姑
の呆けと取って来たところは老練であり、現代的なあわれ
としおりが感ぜられるのではないか。しかも、前句「あけ
っぱなしに風が抜け」というのも、何か纏渺とした虚無が
感じられる。

このすぐれた二連にそれぞれ外廁が出てゐるのは不思議
だが、凡兆が芭蕉に「尿糞のこと申すべきか」と質問した
のに「嫌ふべからず、されど、百韻というとも二句に過ぐ
べからず。一句なくてもよからん」と答えている。

現代は、あまりに便利に、警沢になりすぎたため、外廁
は、僅かに残された「しおり」の場の一つかも知れない。

平井照敏氏の説によると、日本近代の俳句の歴史は詩を
重んずる因子(正岡子規―河東碧梧桐―水原秋桜子―中村
草田男―金子兜太―高柳重信ら)と俳を重んずる因子(高
浜虚子―石田波郷―飯田龍太―森澄雄など)の相克にある
というがこれは俳句の世界に限ったことではなく、連句の
世界にも顕著にあらわれている。外廁や呆けをあわれと
見、しおりと見るのが連句界の俳の因子であることは間違
いあるまい。

「市中は」の巻 鑑賞(III)

東明雅

2 露の芽とりに行燈ゆりけす

蕉

3 道心のおこりは花のつぼむ時

来

(現代語訳) ある夕暮、露の臺を取りに行き、行燈をゆり消したことから、この人はその場で発心して尼となった。それはちょうど花が苔みのころのことであった。

(付心) 其人の付。また時節の付、観想の付でもある。

(付味) 人生は風前の燈というが、世の無常を観想したのが、時は春先の花の苔むころであったというのは、この人のまだ若々しい年ごろも思い合わせられ、前句の句やかな気分に応じている。能勢朝次が「うつり」と見ているのも納得できる。

(転じ) 打越・前句に見られた若い女性の嬌態から、同じ女性でも今度は観想の句となり、一応気分は変わっているけれども、「花の苔む時」というはなやかな言葉が利き

り、後には信濃の善光寺に住んだという話は有名である。

しかし、前句から見て、この句の主人公を男性と見る説

(折口信夫) はいささか無理であろう。近世期には男は十九(釈迦・清十郎・世之介)・女は十六(中将姫・お夏)が出家の年と考えられていた。作者去来の胸中に、中将姫やお夏の俤が存しなかったとは断言できないであろう。

3 道心のおこりは花のつぼむ時

来

4 能登の七尾の冬は住うき

兆

(冬。人情自)

(現代語訳) 発心して出家したのは、まだ花も蕾のころであったが、修行者として住んでみると、この能登の七尾の冬はきびしく住みづらいくところである。

(付心) 人情自の句。前句を男性と見かえ、その人の述懐を付けた其人の付。また、見仏上人の俤付と見る説もある。「撰集抄」は西行法師の作と伝えられる仏教説話集で、その巻三に、見仏上人の話が出ている。上人は月に十日は松島からひそかに能登の岩窟に来て断食苦行をしていたという。西行に答えて、「難波かたむら立つ松も見えぬ浦をここ住よしと誰か思はん」と詠んだという。「冬は住うき」は「ここ住よし」をもじったもので、見仏上人のことは「おくのほそ道」松島の条にも書かれているくらいであるから、この句はやはり、見仏上人の俤の句と見るべきであろう。人によってはウ6の「待人入し小御門の鑑」が源氏物語の俤であるから、俤の打越はまずいだらうとする

すぎて、恋を含んだ気分はまだ転じられていない。

(補説) 打越以下の三句に、「草村」・「露の芽」・

「花の苔」と引続き植物が付け出されている運びに對して、暁台が「中の句に露の芽あれば植もの三句続きたりよく味ふべし。前二句を一章と見る法也。然れば打越の論なし。名人の手段おそるべし」(秘註七部集)と言っているのは、前二句の草村と露の芽を同一物と見てのことであるろうか。ちょっと苦しい言いわけである。しかし、ここで花の句を引き上げたのはよかった。もし、素春にして、定座に花を出すとすれば、一卷の気分は混乱を免れなかっただろう。この巻、花の定座には月を出し、いわば、花と月とを入れかえた形になったので、うまくおさまっている。

また、この句を何かの俤付と見る説もある。たとえば、説教浄瑠璃「刈萱道心」の加藤左衛門茂氏が花の薔が盃の中に散りこむのを見て無常を感じ、出家して、高野山に入

説もあるが、そのような点は、蕉風俳諧では割合に大まかであることは、この前句もすでに俤付らしいと言っていることでも分かるだろう。

(付味) 前句——の——は——の——とき

付句——の——の——は——うき

という似通った声調と、さらに、

no to no na na o no

o - o - o - o - o - o -

fuyawa suniki

という音の配列が、いかにも単調で、前句の悲しく寂しい気分のうつりである。

(転じ) 打越は女性の姿であるが、ここで修行者のきびしい生活に一転している。

(補説) ここは春から冬への季移りであるが、前が過去のことを言っているので、不自然な感じはない。このように季移りは、不自然感さえなければ冬から春へ、あるいは冬から夏へでも転ずることができる。これと間違えられやすいものに季戻りがある。季戻りとは、同じ春(秋)三句の中で、晩春(秋)・中春(秋)・初春(秋)と続けるようなもので、これは禁ぜられている。さきの、蛙・露の芽・花のつぼむ時は、やや季戻りの感がある。

また、七尾は能登半島最大の都市で、能登国分寺跡もある、歴史の古い町である。石川県内でもっとも雪が少なく、温暖で景色もよい所である。しかし、その実情とは関係なく、この句では寒い北国辺土の代表としてあげられてい

る。この句の作者凡兆は加賀金沢の生まれであるから、「隣国能登は、文化的にも風土的にも恵まれぬ僻地と映っていたと思われる」と伊藤正雄氏は指摘されているが、これは納得されるところである。

4 能登の七尾の冬は住うき

5 魚の骨しはぶる迄の老を見て

(雑。人情白)

(現代語訳) 齒も抜け落ち、魚の骨をしゃぶって生きて行かねばならぬ老人となった今、この能登の七尾の冬は住みにくいことだ。

(付心) 其人の付。この付心を「三冊子」には、「能登の七尾の冬は住みうき

魚の骨しはぶる迄の老を見て

前句の所に位を見込み、さもあるべきと思ひなして、人の体を付けたるなり」と説明している。これは前句に詠まれた能登の七尾という場所のわびしい位を見定めて、さういふこともあるうかと推量して、前句の人の様子を付けたのであるという意味であらう。

(付味) 「三冊子」に位という外、逆志抄には「魚の骨は前句の七尾のしをり也。老を見ては冬は住うきというよりの響也」という、響の付け味と見る説がある。また、能勢朝次の「連句講義」には、前句全体を包む寒くあわれな気分、「冬は住うき」とかこつ語気から生まれる哀老の

どもここに流され、その墓は珠洲にあり、曾々木には嫡子平時国の邸が残っている。

5 魚の骨しはぶる迄の老を見て

6 待人入し小御門の鑑

(雑。恋。人情自他半)

(現代語訳) 齒が抜けて魚も骨をしゃぶる有様になった老人から鑑をとり、通用門を明けて姫君の恋人を邸内にお入れ申したことであった。

(付心) 佛の付。このことについては、まず「去来抄」に「浪化曰く『今の俳諧に物語などを用ゆる事はいかか』去来曰く『おなじくは一卷に一・二句あらまほし。猿蓑の待人入れし小御門のかぎ、も門守の翁なり。この撰集の時、物語等の句少なして、粽ゆふとの句を作して入れ給へり』(註「粽結ふかた手にはさむ額髪」とあるが、浪化宛去来書簡(元禄七年五月)には、もすこし、くわしく書かれてはいる。「さるみの集」に源氏に下心をふくみたる句御ざ候よし被仰下候。成ほど御目きゝの通りに『隣をかりて』は夕かほ、『待人入れし』はひたちのみやと存じよりて仕候……」

右によつて、この句が源氏物語末摘花の巻の記事「御車出づべき門は、まだあけざれば、鍵の預り尋ね出でたれば、翁のいとみじきぞ出で来たる。むすめにや、孫にや、はしたなる女の、衣は雪にあひて煤けまどひ、寒しと思へる気色ふかうて、……翁、門をえあけやらねば、寄

感、そうした余韻の「にはほひ」を以て、更に寒苦に悩む衰老の状を付けているというから、「にはほひ付」と見ているのであろうか。この点、位の付であることは間違いないけれども、響付か「にはほひ」付かの判別になると、各人各様の意見があり、私としては感情に激しさがあるので、響の方が適切であると思うが、いかがであらう。

(転じ) 打越の道心者から、在俗の老人への変化で、場面も気分も転じている。この転じに有効だったのが「魚の骨」である。さらに「しはぶる」(しゃぶる)の語が特に活きている。齒の抜け落ちた老人が、骨についた魚の肉をしゃぶっている様子が、貧寒の実態をまざまざと表現している。「古集弁」に「寒苦の人をさだむ。具さびあり」と言っているのも首肯される。

(補説) 「類船集」によれば、「能登」には、鱈、鳥賊の黒漬などが付合語となっている。特に能登鱈は有名で、それで前句の「能登」から付句に魚が出て来るのであるが、その魚も夏から秋までは大変よく取れるが、冬は不漁の日が多い。それで「魚の骨しはぶる」というのが出て来るわけだ、この句には老いて寒国に住んでいるという上に、貧しいものも加わっている。

解釈によつては、土着の漁夫が年老いたのを嘆く意にも取れないことはないが、土着の人なら「能登の七尾の」とは言まいし、また言っても感慨が切ではない。故あって都を離れ、あるいは都を追われて、辺土に身をかくした人などの境涯であらうか。能登はもと流刑の地で、平時忠なりてひき助くる、いとかたくななり。御供の人寄りてぞあけつる」とあるのに依っている。源氏では光君が帰ろうとされた時の情景であるが、それを去来は光君みたいな貴公子の恋人が入って来られるさまに作りかえて、一層賑わしくはなやかなものにした。伊藤正雄氏は「前句の老残の人をこの門守の翁として、艶麗な貴公子をこれに配し、美醜を鮮かに対照させた、いわゆる違付である」と言っておられ、一種の向付として取っておられる。これも尤もであるが、私は、この一句に待人と彼を入れる門番が居るので、いわゆる向付とは見難く、自他半とすべきであると思う。

(付味) 先にも指摘したが、「末摘花」の巻では、光君が姫の家を出る時の情景となっているが、それを去来は、光君が来られた時の様子に作り変えている。浪花宛去来書簡には、このことについて、「他流には物々さき(面倒だ)とて仕らざる人(佛付を使わぬ人)も御座候。しかし、それは書物のままにて己が物に仕ゑざるゆへに物々さくなり候。言葉なども直に書物のまゝに句づくり候ゆへあまく成行候。故事にても我物にいたし仕らんに別状あるまじき事に奉存候」と述べている、要するに古典そのままを取り入れるのではなくて、自分のものにして付けねばならぬと教えているのである。佛付とは全くそうあるべきもので、「逆志抄」が「出るを入ると転じたる手づまにて俳諧になる也」と言っているのは至言である。手づまとは手品、マジックである。

(転じ) 裏に入って第一句目から、「蛙こはがる夕まぐ

れ」と昏く、その次が「行燈ゆりけす」でまた昏く、さらに折角の花も「道心のおこりは花のつぼむ時」と釈教や観想と結びつき、それからは僻地の冬のきびしさ、魚の骨をしゃぶって衰老の身を養う人と、暗い陰惨なイメージの句が続きすぎた。そして、ここで漸く恋の句、それも待ちかねた貴公子が入って来られ、眩いばかりの明るさに一転してきたのである。また、打越前句の僻地の貧寒なさまから、小御門という語により高い位に一拳に転じ得ている。

(補説) 太田水穂は「老を見ての『見て』は、前句では老人の身に重ねて来た老であるが、この句へ来ると待人がさう云ふ老人を眺めながら門を這入って行くので、この句の出で来る動機も実は前句の見てといふところに心を入れて、そのきつかけから待人入りしと出して来たもののように思はれる。それほどこの『見て』は当句からは大切な字眼になって……」と述べているが、大事な姫の愛人に、魚の骨をしゃぶっている所を見られたのでは、切角の恋がさめよう。あまりにも拘泥した考えとして賛成できない。

6 待人入し小御門の鑑

7 立かゝり屏風を倒す女子共

(雑。恋。人情他)

(現代語訳) 通用門をあけて来られた姫君の恋人の姿を一目見ようと、末の女たちは大騒ぎで屏風によりかかり、とうとう押し倒してしまった。

(付心) 前句の門番とその門を通って入って来られた男

問のくだり、さらには十返舎一九の「東海道中膝栗毛」赤坂の宿で、新枕の隣室に泊った弥次・喜多が夢中になってのぞきこみ、境のふすまを押し倒す話などに残っている。

打越と前句は完全に源氏物語の世界であったが、三句にわたって同場所では困るので、ここは離れた方がよい。しかし、あまり落しすぎて、民家や旅宿の景とすると「小御門」の位に合わない。それでやや庶民的になりつつも、まだ、ある程度の品格が必要であった。この句は原形は「屏風をかすをなご共」であったのを「屏風を倒す」と改めたのも、この配慮によるものであろう。

7 立かゝり屏風を倒す女子共

8 湯殿は竹の簀子佗しき

(雑。人情なし)

(現代語訳) 家の表では婚禮を見ようと、下女や手伝いの女どもが立ちかかり、とうとう屏風を押し倒すような賑かさだが、その家の裏の湯殿はひっそりとして、竹の簀子がわびしげである。

(付心) 其場の付。

(付味) 前々の浮き浮きした気分と、付句のものの寂びしい気分とは、全く反対であるが、女子共と湯殿、屏風と竹の簀子の位が、完璧であるために、相反した世界が一つに統合され、独自の世界を作り出している。

深川の夜(阿羅野)

雲雀さへづるころの肌ぬぎ

越人

性に対し、それを視見しようと縛きあう女たち、これは向付である。古い註釈書(たとえば大鏡など)には、この句までも常陸宮の邸内のこととし、源氏物語の佛とし、確かに末摘花の巻にも「乳母だつ老人などは曹司に入り臥して、夕まどひしたる程なり。若き人三人あるは、世にめでられ給ふ御ありさまを、ゆかしきものに思ひきこえて、心げさうしあへり」(光源氏を意識し、改った気持ちになっていた)とあるけれども、このようなことはあとで述べるように、どこにでもありがちなことであり、同じ場所の佛が三句続くということも不都合である。源氏物語の世界に限定し、末摘花邸の佛と見る必要はない。

(付味) 軽くユーモアたっぷりに捌いているが、前句の待人が来たよるこび、賑かきの浮き浮きした気分が通っている。これは響の付と見てよいだろう。

(転じ) 打越の句の凄惨ともいうべき老の姿に対し、これは若い女性の賑かきにあふれ朗明・諧謔の気分が溢れ、まず、この暗さから明るさへ大きな転換が見られる。さらに前句は全くの貴族的情景であったのに対し、これは、やや庶民的となりつつも、まだどこやらに一派の品格を保っており、打越の貧寒な生活からは全く転じている。

(補註) この一句だけでは恋の句にはならないけれども、前句につけてみれば、はっきり恋の句である。

また、屏風は現在では冬(三冬)の季語であるが、近世期ではまだ季語に入っていない。さらに、屏風をめぐる滑稽な話は、「枕草子」第三段・「狭衣物語」巻一「今姫君訪

破れ戸の釘うち付る春の末

見せはさびしき麦のひきわり

この一連に似たところがある。

芭蕉

(転じ) 打越に小御門があり、この付句に湯殿があり、居所の打越ではないかという論が昔からある。これにはいろいろ説明があるが「居所三句統けて、中の句屏風と出たれば居所細なし」(逆志抄)という説明が一番合理的で納得がゆく、即ち、居所は三句去りだが、また三句統けることも出来るのである。中の句を居所と見れば、三句統ける居所であるから、去嫌の難はのがれる。

(補説) 前句と付句、この一連の解釈はまちまちである。①田舎の旅宿―本陣などで客が去ったあとのさまとするもの。②片田舎の旅宿のさま、③田舎の旧家の婚礼の場、④宮仕えした女の宿下りのさま、⑤この句までも源氏の佛とする。以上のうち、⑤は源氏の佛を三句にわたって取ることは連歌の時代からの禁制であるから別として、①から④まで、それぞれの理由が存する。しかし、ざわめく家内とひっそりした湯殿の淋しさ。華やかな風景を通して哀愁の気を出すところに、芭蕉の得意な手腕が認められるとすれば、③などが最もそれに叶っているのではないかと思つたのである。「小傘」には旅宿―湯殿という付合があるが、客が去った後、女中がばたばた後片づけをして屏風を倒してしまつたなどと解するのは、芭蕉の付句の真意を解せぬものといふべきであらう。

脇起り追悼歌仙 春の人

佐藤 和夫 捌

日溜りを行き行き浅き春の人
池面に映るつばくらの影
桜餅皿に葉だけが残りあて
欠伸しながら削る鉛筆
てのひらに月の光りの満ちにける
色なき風の吹きわたる街
咳の声が聞こゆる秋すだれ
名譽教授は読書三昧
ふるしきを下げ駅前へ買物に
いつまでも待つ交番の前
キープするポトルにいとし情夫の名
ある筈のもの無くてあわてる
雷のあと森も林もしたたりて
鐘の音涼し柴又の月
職人がくはへ煙草で急ぎ足
経師屋が来て普請濟みける
花陰の古りし祠に詩を捧ぐ
そっと開きし淡雪の傘

香歩 弘
和 夫
明 雅
徒 彦
時 彦

雅彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦

濛濛と紺の制服新社員
N T T株買へぬ口惜しさ
ワープロを老眼鏡をかけて打ち
かがし揚げして遊ぶ子供ら
新婚のはじめて作るのっぺ汁
雨戸をしめて宿直のあけ
浄瑠璃のさはりのくぜつ哀切に
香車が成って玉手飛車取
夢の中髻を剃ったる幼な顔
ドナルドキーン源氏説きをり
見はるかす須磨も明石も月ならん
秋の遍路となりたどる道
山際の空を渡る雁の列
話の絶え間渋茶さし出す
逝きし友偲びて織りし綾錦
穀雨のけふの静かなりけり
花びらのひとつ離れて水の上
親も揃ってぶらんこを漕ぐ

雅彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦 彦彦

昭和六十二年三月二十一日 首尾
於 俳句文学館

香歩先生を悼む

佐藤 和夫

昨年、十二月十四日の午後、鈴木香歩、草間時彦、東明雅、杉内徒司の諸先生とともに、俳句文学館で歌仙を巻きました。その結果は「連句」の第十六号（昭和六十二年三月発行）に「歳の瀬」として出ております。そして十日後の十二月二十四日に香歩先生はお亡くなりになりました。香歩先生は英文学者として著名な方であります。早稲田大学名誉教授として勲三等を下賜され、跡見女子短期大学学長も勤めておられました。先生の教室からはすぐれた英文学研究者が輩出しました。

個人的なことを書かせていただきますと、私は先生の古い不肖の弟子です。そして英文学のほかに俳句の面白さ、連句の楽しさを教えてもらいました。

「歳 of 瀬」のあと、私はニューヨークに行き、先生の逝去、ご葬儀を知らずに年が明けて帰国しました。生前、酔余の席で、先生のお葬式は万端私がやりますからなどと冗談を言っておりましたので、痛恨の思いをどうぞお察し下さい。

香歩さんのこと

草間 時彦

鈴木香歩さんが亡くなった。急逝だった。その報を受けたとき、人というものは、私自身を含めて、いつ、どういうことで死ぬか判らないものだ、としみじみ思った。鈴木さんの笑い顔は、まことにいいものだった。たちまちに親近感を覚えるというような笑い顔だった。ああいう笑い顔をする人は、心も美しいし、人間としての厚みもある人なのだろうと、いつも感じていた。

この人のネクタイをしめた背広姿を見たことがない。いつも、ラフで気楽な格好をしていらっしやう。それがよく似合った。ただ、鈴木さんは、学長としての公式の場では、どんな服を着ていられたのであろう。私はふと、そう思ったことがある。

いい人だった。敬愛出来る人だった。私は連句の友の一人を失ったという思い以上に、大切な友人を失ったという悲しみが濃いのである。

その笑顔遺して年の暮れにけり
私の悼句である。

亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行

第二十一回 猫蓑会

第二十一回猫蓑会は四月二十五日(土)、江東区亀戸天神社事務所で、同天神藤祭りの一環として、正式俳諧を興行、奉納し、そのあと、二十韻七巻を首尾した。

第一部 正式俳諧興行 「遷東や」一卷

第二部 二十韻興行 「藤の房」他六巻

(一) 役割

宗匠 東 明雅
脇宗匠 杉 杉亭
執筆 中 川 哲
知司 杉 内 徒 司
副知司 秋 元 正 江
副知司 中 島 啓 世
座見 山 口 みづゑ
座配 下 鉢 清 子
花司 式 田 和 子
配硯 原 田 千 町

(二) 次第

- 一、席入り (知司の指図により座見・座配の役)
- 二、配硯 (重ね硯を配る)
- 三、献花 (花司)
- 四、執筆呼び出し (宗匠)
- 五、文台捌 (執筆)
- 六、俳諧興行 (知司、挨拶のあと連衆付句)
- 七、花前 (執筆)
- 八、玉串奉獻 (宗匠)
- 九、花の句披露 (宗匠)
- 一〇、端作り (執筆)
- 一一、吟声 (執筆)
- 一二、文台返し (執筆)
- 一三、作品奉納 (執筆)
- 一四、挨拶 (知司)

二十韻 遷東や

遷東や鎮めの宮の藤祭り
纏悠々とうららかな池
凧作る多くの仲間集りて
咽喉うるほす紅茶一杯
湯上りの肌を照らして月涼し
擦りよるものは蛇の化身か
オフィスでは評判のよきタイピスト
濤の彼方に白き灯台
大島の山の噴火も時に見え
ジョギングにまで蹤いてくる犬
獵人の獲物も年々減るばかり
杜氏迎へてきりたんぼなど
北国の女の情にほだされて
踊浴衣の派手な染柄
満月の空にうすうす雲遊ぶ
幼児の籠逃ぐるきちきち
道端の屋台に何の人だかり
放送局のビデオ車が着き
新しき文臺花に使ひ初め
霞の中に望む名所

武司 正江 篤子 正雄 麻子 貞子 孝子 天留子 徒司 久美子 啓世 東夷 彬風 淳子 明雅 隆秀

拝啓、陽春の候愈々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、先日は正式俳諧をご奉納賜わり、厚く御礼申し上げます。本日は懐紙をお送りください、重ねて御礼申し上げます。

早速乍ら、御神前に献供いたしました。さぞかし天神様もご嘉納のことと存じます。

正式の俳諧は初めてのことでしたので関心深く、興味を抱いて参席させていただきました。

執筆の作法は、茶の道のお点前を思わせ、格式高い諸作法に、四季の折々に、連歌会が興行された当宮の連歌会もかくあったものかと、遠く江戸の頃を想い起しておりました。貴重な体験をお与えくださいまして、誠にありがとうございます。深く感謝いたしております。

連衆の皆様方へも宜しくご鳳声ください。日々ご忙のことと存じますが、折につけ時にふれて、どうぞお気軽にお立寄りくださいませれば幸いです。

陽春とは申せ天候不順の折柄くれぐれもご自愛くださいませようご祈念申し上げます。

敬具

四月廿九日

東 明雅 様

木村 恒雄

